

G・ルカーチのソルジェニーツイン論

青木 順三

アレクサンドル・ソルジェニーツインの名が日本でも喧伝されるようになってすでに久しい。いわゆる「雪どけ」の状況の中で、一九六二年に彼の処女作『イワン・デニソビッチの一日』がソヴィエトの文学雑誌『ノーヴィ・ミール』に発表され、いわば文学界における非スターリン化の旗手であるかの如くに看做されて世界的な反響を呼んで以来、彼の新しい作品が書かれるたびにその評価——ことに「公的な」評価をめぐって繰返されたソヴィエト文学界における官僚的非文学的で醜惡な論争のことや、現在では彼の作品は公刊が許されず、英米など西欧で出版されるのみで、ソヴィエト国内では一部の文学愛好者の間で原稿のコピーが回覧されているにとどまることなど、彼の名はしばしば新聞紙上を賑わせてきた。しかし、彼がこのような形で——一部は反ソ反共の波にのって——ジャーナリズムの話題に供せられてきたことは、彼の文学にとっては不幸といほかないであろう。私自身、最近になって邦訳されたかぎりでの作品にできるだけ目を通し、『イワン・デニソビッチの一日』のあくまで地味な押えた筆致や、『マトリョーナの家』のチェ

ーホフを思わせるような、いかにも「ロシア的」な味わいに接するまでは、ジャーナリズムの目を通して伝わるこの作家の像に何かきわもの的なうさんくさい臭いがつきまといっているかの如き偏見から脱することができなかったのである。

無知や偏見はさておき、私がソルジェニーツインの作品を読んでみる動機になったのは、西ドイツの Luchterhand 社から一九六九年に出版された小冊子 Georg Lukács: Soltschenizyn である。本書はルカーチがこの作家について発表した二つのエッセイを収録しており、一つは『イワン・デニソビッチの一日』およびその他二三の短篇を論じた一九六四年の文章、いま一つは Soltschenizyns Romane と題して彼の二つの長篇『地獄の第一圈で』（邦訳名『煉獄の中で』）および『ガン病棟』を論じた一九六九年の文章である。今年年齢も八十代の半ばに達したマルクス主義文芸理論の「老大家」、しかも亡命や戦争やさらには例の一九五六年のハンガリーの動乱を経て幾たびか毀誉褒貶の波をかぶり、少なからぬ苦渋も闊したはずのルカーチがこのようなテーマについて熱のこもったエッセイを執筆すること自体、私にはすでに何か驚嘆に値するように思われたし、さらにこの二つのエッセイに現われているルカーチの、新しい文学の誕生を待望する若々しい情熱——というより、幾分平俗な言葉で言えば、無類の文学好き、小説好きの老人が若い世代にかけている大きな、そして暖かな期待といった趣き——にはある種の感動を禁じ得なかったのである。以下にこの二つの論文の要旨を私なりにまとめながら、二三の感想を記しておきたい。

けだし私にとっては、ソヴィエトの新しい文学の動向やその可能性の問題もさることながら、現在という時点におけるルカーチの発言そのものにこそ、より強い関心をひかれるからである。

*

ルカーチは、第一の論文の中でソルジェニーツインの短篇を論ずるに当って、そもそも短篇小説が成立するのは、歴史的に見て、一つの社会的世界を大叙事詩形式の作品によって概括することが「まだできない段階」かあるいは「もはやできない段階」かにおいてであるという独特の規定をまず述べている。ブルジョアの社会についていえば、前者は典型的にはボッカチオ、後者の典型はモーパーサンである。さらに、ブルジョア世界において叙事文学が短篇小説的なものに後退している例としてコンラッド(『台風』等)をあげている。そしてこれと対比しながら、ソルジェニーツインの短篇は一つの時期の終末を意味するものではなく、むしろ新しい現実を模索する最初の試みであるとするのである。

彼はスターリン時代という過去、すなわち現在に生きる大部分の人間が体験し、生きて来たこの過去を真に克服することこそ社会主義リアリズムの今日の中心課題であることを力説する。ソルジェニーツインはスターリン治下のある收容所の日を描いたが、彼が意識的にあらゆる展望を放棄し、厳密に短篇小説としての枠を守ったことによって、かえってこの時代の日常の

諸問題の全体像を象徴的に把握することに成功した。ここにはスターリン時代という「学校」を卒業した人々すべてが背負っている人間的道德的な中心問題の見取図が描かれている。「この問題を抜きにしては、現在生きている人間は、客観的には存在しえないし、主観的には理解しえないであろう。彼が簡潔で凝縮された抑制の姿勢をとったことによって、直接的には範圍を極度に限定された人生のこの断面が、来たるべき大文学の序曲をなしているのである。」

彼は、同じ作者の『マトリョーナの家』、『クレチエフトカ駅にて』、『公共のために』について、これと同じような本質的性格がそれぞれ異なった程度に見られることを指摘して、ソルジェニーツインは、簡潔かつ客観的な、そして説明的でない表現手段によって、暗示的に、個々の人間と状況とに典型としての生命を吹き込む力量を備えている、と書いている。

ソルジェニーツインによって一步を踏み出した歩み、スターリン時代に光を当てることによって現代を解明するという課題は、今後どのようにして成功しうるのか。この問いに対してルカーチは直接的回答は避けている。しかし、彼はこの小論の結びの部分で、この課題にとって、障害は、一方ではあらゆる形でのスターリン主義の残滓であるとともに、他方では表現技法の上での近代性のみを追い求めるような誤った態度からも生じうることを指摘する。すなわち、社会主義への失望が、西側の疎外された懷疑の様式問題と結び付けば、そこには結局のところ亜流しか生まれない、というのがルカーチの警告である。こ

こには前衛主義^{アンチ・エスタブリッシュメント}に対する年来の主張が繰返されているとい
ってよい。そして彼がソルジェニーツィンに、二十年代におけ
る社会主義リアリズムの最初の興隆期の遺産を継承するという
期待を寄せているのは、この新しい作家が右のような危険な
傾向とまったく無縁なところにあるからのものである。

*

第二のエッセイをルカーチは次ぎのような文章で書き出して
いる。すなわち、ソルジェニーツィンがはたして社会主義リア
リズムを再生させ、それを世界文学的意義を持つものにまでふ
たたび高めうるか否かという問題については、第一の論文の中
では慎重に回答を保留しておいたが、「今や私は、自分が慎重に
過ぎたことを喜びをもって確認することができる」と。そして、
あらゆる時代の偉大な文学は、すべて所与の社会の状態、発展
段階、発展傾向が、人間の人間化あるいは非人間化にどのよう
な影響を及ぼしているかを示してきたとして、ソルジェニーツ
ィンの文学はこの点では単に社会主義リアリズムの最初の興隆
期の優れた遺産を受継ぐばかりでなく、偉大なロシア文学、特
にトルストイとドストエフスキの大きな遺産をも継承するも
のである、とほとんど激賞の言葉を述べている。

このエッセイは右の前書きを除き四章に分かれ、スタイルの
問題を歴史的に論じた総論的第一章のあと、『地獄の第一圈で』
および『ガン病棟』の二長篇をそれぞれ論じた二つの章を間
はさんで、最後の章がこの作家の作品の限界を批判的に指摘し

た部分を含めた結論という構成になっている。

第一章の総論の中で特に注目に値するのは、ルカーチがソ
ルジェニーツィンの長篇小説の構成をトーマス・マンの『魔の山』
と対比している点である。『魔の山』の構成上の特色としてル
カーチが指摘している重要な点はほぼ二つあって、第一は、小説
の舞台がこの場合結核療養所という人為的な場所から切り
離れてここに集ったことによって「正常な」形ではない「偶
然の」人間関係におかれていること。またこのことによって、
元来社会の到るところに存在する問題でありながらそれまでは
彼等が意識していなかったイデオロギー上の諸問題が登場人物
たちの意識に上ってくることになり、各人がこれと対決せざる
をえなくなる、ということである。また第二は、短篇小説とし
て書き始めた作品が、新しい環境におかれた主人公たちのあら
ゆる反応を深く広く探究し、展開させて描いているうちに、普
遍的な内容を備えた長篇小説に成長していったという点である。
まともていえば、「(人間の)あらゆる反応の総体^{ソリット}の問題を、
この長篇小説の構成の中心に据えたこと」が『魔の山』の手法
上、構成上の特色であるとし、ルカーチは、このような新しい
構成上の特色が歴史的に必然性をもって生まれ出た経過を、資
本主義の発展による社会の変化や、自然科学的認識において因
果律が否定され、確率の法則が優位を占めるようになった推移
の過程と関連させて論じている。この問題に関するルカーチの
所説を論評するだけの紙幅はないが、彼がソルジェニーツィン

の二つの長篇と『魔の山』との単に外見的な類似点を指摘しているのではないことは明らかである。すなわち二つの長篇はそれぞれ刑務所と病院という特殊な場所を舞台にしており、しかも短篇小説のエピソードを積み重ねるような構成になっている、この点に『魔の山』との明らかな類似性があるが、これは影響とか、ましてや模倣とかの問題ではなく、もっと深い時代的文学的理由のあることであって、ソルジェニーツィンは、このような手法によってこそスターリン時代およびスターリンの死後、新しい時代の端緒の時期の社会に対する人間の「反応の総体」を正しく見事に描くことができたのだ、というのがルカーチの解釈なのである。なお、この点については、ソルジェニーツィン自身があるインタヴューで述べている見解から見ると、ルカーチが高く評価しているところは、作者がまさにねらいとしている点であることがわかる。また、ルカーチのトーマス・マンに対する評価が他の二十世紀の作家全体に比較して格段に高いことは周知の事実であって、このことを考慮すれば、彼のソルジェニーツィンに対する評価の高さはいし期待の大きさが推察できるとはいえないだろうか。

さらにルカーチは、トーマス・マンとソルジェニーツィンとを結びわば中間項的な存在として——意外の感を免れないことは論者自身も充分意識しながら——マカレンコをあげる。彼の教育小説において、トーマス・マンに始まった右のような小説構成の技法が、最も純粋な形をとって現われているというのである。そして、「社会主義の英雄的興隆期の偉大な教育者」の

場合と「社会主義のこれまでに最も深刻な危機を形象化した重要な作家」の場合とは、芸術上の具体的問題設定は当然まったく異っているが、しかも表現方法の上で同一線上での展開が見られるのは、歴史的状況にその第一の原因がある、とするのである。

『地獄の第一圏で』を論じた第二章の中では、変り者 (Solitarius) に関する所説が最も注目される。ルカーチは、ルービンやソログジンといった主要な人物像の性格の中に変人的気質が見られることを指摘したあとで、変人氣質というのが資本主義以後の社会における個人と社会との独特な相剋の中からはじめて生まれたものであり、主体に影響を与え主体を歪める社会の力の故に、個性と社会性とを同等に包括するような反体制的生き方が不可能なところから、正当な、誠実な抵抗が客観的には気まぐれなものに歪んで行かざるをえないことの現われであると主張している。なお、この作品の中にエピソード的に登場するスターリンその人の像について、ルカーチはかなり肯定的に評価しているが、この点には多少の疑念が残る。私にはこのスターリン像はむしろ図式的なものに思われ、たとえばチャップリンが演じた「偉大なる独裁者」の戯画ほどの肉付けも感じられなかったからである。

第二の長篇『ガン病棟』は、スターリン死後の新しい時代の始まりを描いており、従ってその状況が現在の時点に最も近いだけに、それを描くに当っては遠い過去を描く場合よりも未来への展望がより強く要求されることになる。しかし、たとえ

ばここには、良心の呵責に苦しみながら一步一步妥協と後退を続けて辛うじてスターリン時代を生き残ったシェルビンという悲劇的人物が「道徳的社會主義」を説くのだが、この人物の見解に対する作者の態度は不明である。この点はルカーチが指摘しているとおりの問題を含んでいるだろう。一方、二つの作品に登場する多数の人物の中に、誰一人として社會主義体制の崩壊や資本主義の復活を念頭に浮べる者がいないことから、現在の現実に対する作者の見解が見てとれるということから、ルカーチが今更のように強調しているのは、何か配慮するところあつてのことなのだろうか。

*

さて、ルカーチは二つの長篇の内容を、個々の人物像にもふれながらかなり詳細に論じたあとで、もう一度その構成上の特色を指摘する。すなわち、この二つの長篇に登場して、同一の社會的問題に対して個々にさまざまな反応を示す人物たちは、物語りの筋の上では相互の關係は極めて希薄で、場合によっては全く無關係ですらある。しかし、まさに彼がこのような手法を選んだことによって、描き出された世界——社會主義への過渡期という歴史的に重要な時期——に内在する諸々の矛盾や、その否定的な特徴などの全体像が見事に、これ以上ないほどの完全さで描き出されることになった。これは『魔の山』によってトーマス・マンが創始した技法が極めて実り豊かなものであることを示している。但し作者自身がそのことをどれほど意識

していたかは問題ではなく、「必要なことは、作者が『適用された』抽象的創作原理から出発するのではなく、彼の素材そのものが持つダイナミックな一体性から出発すること『だけ』なのである。」この意味で、彼は自分の作品の芸術的目標にふさわしい表現形式を発見したというべきである——。

ルカーチはこのようにソルジェニーツィンの技法を肯定し、社會主義リアリズムの系譜の中における彼の地位を承認したあとで、それでは彼の作品ははたして政治的であるか、そしてどの程度まで政治的であるか、という問題を提起している。スターリン時代には、ある作品が政治的であるか否かは、それが時局的な特定の政治的問題に対して、特定の具体的な方針を示すような回答を与えているか否かによって決定された。しかも、この場合方針の基準はその時々々の機關の決定だったから、作品が書かれている間に決定の変更があれば、作中人物やその運命も新しい決定に従って書き改められねばならなかった。(その慘憺たる実例はファジーエフの『若き親衛隊』である、とルカーチは書いている)。しかし、文學の政治性とはそのようなものではないことを、ルカーチはマルクスやレーニンを引用して論じている。

レーニンによれば、イデオロギーとしての政治の課題とは、危機的推移の過程の中で、その一環を把握すれば連鎖全体が理解でき、支配できる立場に人間を立たしめうるような、そうした一環を認識し、理解することにあるという。しかし、文學にあっては、このような一環とは常に人間である、とルカーチは

述べる。「その中心の問題は、人間がより人間的になるという社会発展の歴史的使命を推進する上で、さまざまな社会的ファクターがはたして人間を強める働きをしているか、あるいはそれを阻害する働きをしているか」という問題である。この点でこそソルジェニーツインは明確な回答を芸術的に描き出しており、「彼の二長篇小説は、スターリン時代がこのような阻害作用を及ぼしていたことを示す内容豊かでしかも説得力に富んだ要綱であって、作家としてのソルジェニーツインの重要性は第一にこの点にある。」⁽⁶⁾それでは、これは政治的であるだろうか。直接的にはけっして政治的ではない。この作品が読者に示すものが潜在的可能性(Kan)のみであって、けっして無条件的義務(Mut)ではない、という点では。しかしながら、とルカーチはここで、一方ではソルジェニーツインの作品に狭い意味での政治的意図(ないし悪意)を邪推する一部の文学官僚の言辭を誹謗として斥け、他方ソルジェニーツイン自身に対しては、彼の作品がやはり「終局的には——もちろんただ終局的にのみ——政治的である」ことを知らねばならぬ、と説いている。このように論を進めたのち、ルカーチは、結びとして、『ガン病棟』の結末が持っている問題性に、作者の将来への期待をこめた批判の眼を向ける。彼はこの場合にも『魔の山』の結末を引用し、さらにトルストイの農民的・庶民的社會觀の限界と、これが作品の中では克服されているといういわゆる「リアリズムの勝利」に言及しながら論じている。

『ガン病棟』の場合、主人公コストグロートフは庶民的正義

觀を強烈に主張し、これを知的にも道德的にも最もよく體現している。そして彼が作者の共感を担っていることは明らかである。ところがこの人物が小説の結末において、久し振りにふれたシャバの空氣の中で受けた衝撃によって、外的にのみならず内的にもほとんど破滅に瀕してしまう。これは、この人物に対する一種の文学的批判(理論的批判と対比する意味での)と読みとらざるをえない。しかもここには、スターリンからラーベにいたるリアリズムの文学における重要な批判的社會像の中で、文学的批判の役割を果たしてきたフモール、変り者の姿をとって現われるフモールも完全に欠除している。(ここでのルカーチの所説は第二章での変り者論に照応しているが、真剣な批判者、改革者の不可避的敗退を、しかしやはり人間の無力さとして、二面性を同時に表現することによって、時代の不正をいっそう直接的に強く表現する有力な手段が、このようなフモールである、という。)もちろん、このことはソルジェニーツインの批判の真実さや純粹さを損うものではないが、しかし、彼の展^{パースペクティヴ}望を薄弱なものにし、むしろ時には展望が欠除しているかの如き感をすら与える。これは、単なる庶民的存在や意識、感覚にとどまっ^{パースペクティヴ}ては社會の眞の革新には到りえないことの証左である、とルカーチは説いている。

ロシア文学の世界文学的偉大さを形成する基盤の一つであり、社会主義リアリズムの最初の興隆期に到るまで脈々と流れ続けていた庶民的伝統を復活し、来たるべき第二の興隆期の先駆と看做さるべき作品を生み出したこと、この意味においてルカー

チはソルジェニーツインを極めて高く評価する。と同時に、一方では、彼が今後の作品において、スターリン時代に対する単なる庶民感覚的批判者たるにとどまらず、共產主義的批判者として、問題提起の深さ、広さをいっそう拡大し、その文学を一段高度なものに高めることを、ルカーチは期待しているのである。さきに述べたように、ここには新しいリアリズムの文学を待望する熱意が溢れている。そして新しい作品に対しては、その欠点を断罪するのではなく、特色と長所とを入念に賞揚した上で、その過誤を諄々とさすかの如き趣きがある。だがそれと同時に、ルカーチが文学の将来に対してのみならず、一般に人類の未来に対して、その進歩と発展に対して依然として揺るぎのない信念を持ち続けていることに驚嘆したくなるのは、私人であらうか。

(1) 引用されている作家や作品なども含めて、ここでルカーチが述べていることの多くは、すでに次ぎの論文の中で詳論している部分が多い。

G. Lukács: Wider den mißverstandenen Realismus.
Hamburg, 1958.

(2) G. Lukács: Soltschenizyn. Neuwied und Berlin, 1969. S. 20.

(3) ibid. S. 34.

(4) ソルジェニーツインはチエコの文学者バヴェル・リチコのインタヴューの中で、次ぎのように語っている。「どのジャンルを興味あるものと思っているか、ですか。……多声楽的な長篇です。主人公のいない長篇です。……各人物はストーリーに巻きこまれると主人公になるのです。作者はこうして、例えば三十五人の主人公に、責任を負うことになります。……」(栗栖維訳。『新しいソビエトの文学』第六卷 勁草書房 一九六八年刊、三四二ページ)。

(5) G. Lukács: ibid. S. 73.

(6) ibid. S. 75.

〔付記〕本論脱稿後、初校を待つ間に、ソルジェニーツインへのノーベル文学賞授賞が発表された。彼をめぐる「政治的」状況の醜悪さはこれによっていっそう明瞭に露呈したように思われる。

(一橋大学助教授)